姫巫女
ルキナ
愛辱花嫁修業
小説 冬野ひつじ
挿絵 ともみみしもん
立ち読み版

第一章　白濁の洗礼　006
第二章　恥辱奉仕　050
第三章　姉弟堕淫　094
第四章　狂宴の夜　166
第五章　果てなき愛辱　221

登場人物紹介

Characters

ルキナ＝ダグバートル

草原の国ヤガタイを呪術で統括する一族の長女で、姫巫女として民を導く。馬術に長けた戦士でもある。

サラル＝ダグバートル

ルキナの弟。周囲に男だと知られないよう、平素は女の格好をし、ルキナの妹として過ごしている。

オレーグ

ヤガタイへの侵攻を試みるバルディア国の王。ルキナを手中に収めようと企む。

リュドミア

オレーグの第一王妃。妖艶な美熟女。

客人達の前には宝石を散りばめた金細工の食器類や珍しい獣達の毛皮がずらりと並んでいた。だが、豪奢な品々の中にあってなお、二人の「姉妹」はそこに集められた全ての男達の視線を受けている。そしてその「姉妹」の視線の先には――猛々しい縮れ毛の中から突き出した醜怪な肉根がそそり立っているのだった。姉巫女の瑞々しい唇はそのイチモツの粘つく汁ですっかり汚れている。

「……んっ、むっ……チュバッ……」

苦しげな声を漏らしながら、ルキナは生まれて初めての男根の味に身震いしていた。

雑兵達の目の前で淫らなダンスを踊らされた後、酌の相手を務めるようにと着替えさせられ、オレーグの足元に鎖で犬のように繋がれた。

（……だけどわたくしがやらなければ、今度はサラルがこれを……こんな無様な真似は、わたくし一人で十分……）

両手はいくぶん細い鎖で、だが後ろ手で入念に繋がれている。白く細い首筋に巻き付いた金属製の無骨な首輪が痛々しい。

（なんて酷い臭い……それにしょっぱくて……口中に臭いが染みてしまいそう）

剛毛の茂みに形の良い鼻先を時折突っ込ませ、チャリチャリと鎖を鳴らしながら、ルキナはツルリと滑る肉棒を唇で無様に追ってはまた咥え直す。

「武勇の誉れ高い戦乙女サマは、こっちの技は並みの女以下だな……それだと明日の朝になっても出せないぞ？　もっとちゃんと奥まで飲み込め」

「んぐッ……ッ⁉」
うなじを押された途端に唇と舌先だけで感じていた肉棒の形が一気に明瞭なモノになり、そのおぞましさに少女は思わずえずいてしまう。
「うぅッ、ぐぽ……ッ！」
反射的に頭を引くも間に合わず、硬い亀頭で息を塞がれ目尻に涙が滲んだ。
《……あれがヤガタイの……》《いい顔で咥えておりますな……》
さっきの雑兵達よりも格段に位が高いはずの着飾った男達。宴の序盤のとりすましていた顔は、今や娼婦を視姦するただの色呆けした老人達のそれにすっかり変わっていた。
（どうしてわたくしをそんな目で見るの……⁉）
叫びたくても、口の中は太い腐肉で塞がれている。異常極まりない空間の中、巫女少女はその場の男達全員の脳内で、ありとあらゆる淫らな体位で犯されていた。
「そら、脇見をしている暇なんかないぞ」
いきなり頭頂部を鷲掴みにされ、隠した刃が見つかるのではないかと恐怖するが、男は単に更なる快感を得ようとしただけのようだった。そう分かった途端、今度は屈辱感で目尻の雫が膨れ上がる。
（頭は霊力の宿る神聖な部位、誰にも触れさせたことなどなかったのに……！）
「おぶぅッ！　ンンッ、ンぶちゅッ！　ぶちゅぅ……ッ！」
無慈悲に突き込まれた肉塊の勢いに、止まらない涎が品のない破裂音を奏で、談笑して

いた客人達が揃ってこちらを見る。
「ンッ、むぅン！　ぷちゅッ、ぷちゅちゅッ！」
息継ぎなど全く気にもしていない無茶苦茶な力の入れ方に翻弄されて、恥ずかしい音はなおも広間中に響き渡ってしまう。
《おうおう、美味そうに頬張って……綺麗な顔が涎まみれですなぁ》
姫巫女としての矜持も乙女の恥じらいも踏み躙られている様を酒の肴にされ、頭の芯がカァッと燃え立った。
（……許さないっ！　こんな目に遭わせて、わたくしが泣いて許しを請うとでも思っているのだとしたら、大間違いよっ！）
生まれ持った向こう意気の強さが、黒曜石の瞳に力を与える。
上目遣いに睨め付け、さっきよりも頬に力を込めて肉棒を刺激すると、
「んんッ、上手いじゃないかッ」
感嘆半分揶揄半分だろうとはいえ、オレーグの声色が僅かに変わる。
（……こ、このまま続ければいいのね……）
男の息遣いの変化を密かに観察しながら、ルキナは心の中で冷ややかに呟く。
（せいぜい……勝手に気持ちよくなればいいわ）
「ふぅんッ！　んブチュッ……ジュチュゥ！」
吸茎の速度を上げたせいで、飲み込みきれない涎が空気を含み麦酒のような泡となって

口の端から零れ出すが、肉茸の弱点をやっと見付けた少女は、覚えたての技巧を駆使してカリを舌先でなぞり、鈴口をチロチロとくすぐり刺激を続ける。

（……こんな……んむゥッ、こんなモノっ……！）

繰り返しの作業で、窄め続けていた頬と開きっぱなしの顎がだるくなったと感じた頃、頬いっぱいに膨らんだ肉幹が震えた気がして、姫巫女は目を瞬かせる。

（あ……これって……牡馬が子種を出す時と、一緒……!?）

伝え聞いていた僅かな知識と牝の本能で射精の瞬間が近いことを悟り、涎まみれの顔が引き締まった。

「いい目だ、本当に気に入ったぞ……ッ！」

男の気持ちよさげな吐息と共に、肉棒が口の中ではっきりと震えだす。

（さぁ、早く……早く出しなさいよ……！）

「んんっ、ブチュッ！　じゅるッ！　じゅぷぷ……ッ！」

肉棒を包む全ての粘膜に神経を集中させた仕上げの愛撫。牡汁と涎の音が鳴るたびに男の背が反るのが分かり、穢れてしまう恐れと、男を負からせるという興奮に心臓が高鳴る。

「さぁっ、褒美をやろう、どっちだ!?　顔にかけて欲しいか？　それとも口に全部ぶちまけてやろうか……っ!?」

息を弾ませながら、男は問い詰める。

（な、何を……そ……そんなの、どっちも嫌っ！）

生殖からは遥かにかけ離れた、女を辱めるためだけの行為のおぞましさを感じ、身体中の産毛が逆立つ。それでも勢い付いた奉仕穴はジュボジュボと白い泡を跳ね飛ばし、熱烈に牡の性感を沸騰点に導いていくのだった。

（こんな奴の子種なんて飲みたくない……で、でもっ、顔になんてかけられたら……そんな恥ずかしい所をサラルに見られて……）

激しい吸精運動のさなかにそっと隣に目をやると、弟は酒壺を抱えて俯いていた。手を伸ばせば届く距離にいるのに、その肩はいやに小さく見える。

（あの子に、これ以上わたくしの恥ずかしい様子を見せることなんて、できないっ……！）

姉巫女は首を振るようにして最後の力を振り絞り、肉棒を吸い上げた。

「ブチュッ！　はぁっ、チュ……ボッ……く、くちにっ……くぅっ、出して、出してっ、く……くださ……！」

最大限に膨れ上がった牡肉が口中で瘧（おこり）のように大きく震え、そして、

「そうか……そらッ！　しっかり飲めッ！」

ビュルッ！　ビュルビュルッ……ビュルルルッッ!!

「ぶふぅ、んっ……ンぶぅッ!?」

信じられない程熱い飛沫が、咽喉（いんこう）の奥で弾けた。

（嫌ぁっ、汚されてるっ！　わたくしの口っ、こんな奴に臭くて汚いモノを流し込まれてるぅ……ッ!!）

ビュルッ、ビュルッ……ビュッ……ブビュ……ッ……！

原液そのままの子種汁に襲われた口腔粘膜はたちまち拒絶反応を示し、唾液を大量に分泌して押し流そうとするが、粘性の液体は後から後から注ぎ込まれ、口内の激流に少女はまるで溺れているかのような苦悶を味わわされた。

（ンぶぅ、ぐッ……ふぐぅ……臭いっ、臭くて……酷い味……）

嵩を増す粘つく種汁は量だけではなく、その異様な味でも少女を責め立てる。

「よし、残さず全部啜れよ」

「……んぶちゅッ……！　かは……ッ!!」

唇から肉棒をやっとの思いで引き抜くと、唾液と白濁汁の混合液がまだヒクつく肉傘と戦慄く唇の間に重たげに撓む吊り橋をかけた。

（ぷはぁッ！　くるし……）

だが、救いを求めるように吸い込んだ空気も瞬時に汚されて、鼻腔の奥にキツい牡臭を叩き込んでくる。

（なっ、なんでっ!?　全部飲んでるのに、味も臭いも全然消えない!?）

執拗に口の中にこびりつく生臭いとろみ汁は、飲み込むとゆっくりと食道を伝っていく。

（……うぅ、わたくしの身体に、汚らわしい汁が入って……嫌っ、気持ち悪い……）

更に、空っぽだった胃に白濁液が溜まる感触が、姫巫女の思考回路を犯し始めていた。

「咽喉の具合が最高だったぞ。柔らかいが弾力があって……極上の咽喉マンコだ」

満悦の笑みと共に投げ付けられたおぞましい賞辞に、ルキナは慌てて口を手で覆う。だが、もう睨み返す気力も失せていた。
（わたくしは、こんな男に汚されて……なのに何もできずに……）
惨めさと恥ずかしさが込み上げて来て目が潤み始める。気が付けばいつの間にか音楽は止み、客人達は辱められた美姫の顔を淫欲に満ちた眼差しで覗き込んでいた。
椅子に深々ともたれていた男はひとりごち、身を起こす。
「……ルキナよ、お前には奴隷妻の素質がありそうだ」
（どれい……つま……？）
男の言葉の意味が理解できないまま、ルキナは力なく目を向ける。
「それに、俺に心酔し妻となれば、無駄な力を使わずとも自ずから禁呪を口にすることもあるやもしれんしな。明日からみっちり花嫁修業してやる。楽しみにしてるんだな……」
（……わたくしがこの男の、妻にされる……？）
微かに抱いていた帰郷の望みが無残にも消え去るのをはっきりと理解した途端、緊張の糸は完全に焼き切れてしまった。
（そんな……もう、わたくしはこの男から逃げられないの……!?）
「姉上っ、お気を確かに……っ！」
叫ぶサラルの、跳ね上がった一房の銀髪を視界の端で捉えながら、囚われの姫巫女の意識は泥のように重たい闇に沈み込んだ。

縛られた手首に体重がかかり、指は自然とリボンを握り締めていた。
（エッチなことされてるのに、なんでボクがこんな恥ずかしい思いをしなきゃならないんだろう……）
淫らな魔女の粘液のような視線に、下着の中まで搦め捕られているような、妖しい束縛感が少年を更に縛り付けていた。
血の気を失った小さな拳をキュッと握り締め、少年は恥辱に耐える。
「もういいわよ、アマリエ。あとは私に愉しませてちょうだい」
少女はコクリと頷き、女主人のために場所を空ける。
「あらぁ、やっぱりコチコチじゃないの。女の子にオッパイ苛められて悦んでるなんて、純情そうな顔して、変態なのかしら」
妖艶な食虫花のように、ドレスを広げた王妃が少年に覆い被さる。
「そんな、ヘンタイなんかじゃ……ンッ……!?　ムゥ……ン……」
先端を硬く尖らせた舌に唇を割られ、薄桃色の柔毛突起を擦られる。
（ンンッ、ムゥッ……ふぁあ……苦し……ッ……ああ、でもッ、舌の上擦られて……頭の中にまで、ンッ、フゥ……ッ……響いて……）
抵抗感は溶け、気が付けばされるがままになっていた。
（……お口の周り……もうボクと王妃様の涎で、ベトベトだ……）
勢い付いた王妃に唇で挟むようにして下唇を軽く引っ張られ、なぞられ、かと思えば前

歯の裏まで侵入して天井部分の感じやすい個所を舌先で集中的に舐められ、不規則に息を継ぐのがやっとだった。

（……あふぅ……王妃様の舌、アマリエのより大きくて分厚くて……ザラザラしてる……これでオッパイをペロペロされちゃったら、どうなるんだろう）

熱くてねっとりと濃い唾液ジュースを舌の奥に注がれ、否応なしに飲み込まされているうちに、そんな考えが頭に浮かんでしまうと、少年の不埒な期待を読んだかのように、王妃は口付けをやめ、頭を少年の平板な胸に移動させる。

「そんなに食べて欲しかったの？　いいわよ、今食べちゃうからね……ぶちゅ……ゥ……」

少年の初めての口付けを強烈に奪った深紅の割れ目が、今度はささやかな突起に狙いを定め、吸い付いて来る。

「あ、あ……ン⁉」

褐色少女の薄くて細長い舌とは全く違う重量感に、発展途上の乳首はたやすくなぎ倒される。

（この感じ、さっきと全然違う……ッ！　同じ舌なのに、オッパイの先をグリグリ掘られてるみたいだ……ッ）

アマリエほど自在に伸び縮みはしないが、その分リュドミアの舌は重く、乳首をなぎ倒すたびに乳腺の奥まで震動を伝えて来る。繰り返される震動はやがて下半身と共鳴を始め、一切手を触れられていないはずの下腹部が、脈打つように熱くなっていくのが分かった。

（あ、またあのオシッコみたいなのが溜まって……オチンチンの袋っ、苦しいよぉ！）
自慰ショーを目の前で見せられた時よりも切羽詰まった排泄欲が、幼根を下着の中で苦しめる。ぴったりと合わせていた両脚を人魚が尻尾で水を切るように、シーツの上で何度も動かし、薄い腰を悶えさせる。
「ハァッ、ハァ……ッ、お、お許しっ、お許し下さい……ッ！」
氷の塊を溶かそうとするかのように強く抉ったかと思えば、時々唇全体で温めるように包まれる。
（気持ちイイけど、苦しい……！）
乳首とペニスが直結したかのような快感に、狂ったように許しを請うと、女の舌はようやく動きを止めた。
（……あ、ハァ……ッ、オッパイ、溶けちゃうかと思った……）
行き場のない快感から解放された安堵で、ホッと全身の力を緩めた途端、グイと太腿を広げられ、盛り上がる股間部を擦られた。
「う、わぁっ⁉」
太腿と下着の間に溜まり温められていた我慢汁がムワッと臭いを放つのが分かって、動かせないと分かっているのに両手を必死に振り、前を隠そうとしてしまう。
（やだ、変なニオイっ、恥ずかしいっ！）
閉じようと力を入れた脚をアマリエに畳まれ、手際良く固定される。

「や……っ」
桃の皮でも剥くかのようにいとも簡単に下着が下ろされると、桃の果実よりもなお瑞々しいお尻が勢いで弾んだ。右手の甲でまだ一度も毛穴の開いたことのない滑らかな股間と睾丸のミンクのような手触りを楽しみながらも、王妃の視線は一点に集中している。
「ほーら、やっぱりベチョベチョじゃないの。タマタマが元気になるお香を焚いたんだけど……夢精もまだのコには少し効き過ぎちゃったかしら？」
脚から外した初々しい性奴の下着の染みを、愛おしそうに嗅ぎ天井にかざして見せる。
「やっ、そんな汚いのッ、嗅いじゃダメです……ッ！」
「うふふ、汚くなんてないわよぉ……女にとっては、最高の御馳走ですもの……」
くっきりと見える先走りの染みを嗅ぐだけでは物足りないのか、盛り上がって付いている粘液の部分を舌先で掬い、葡萄酒を味わうように頬裏にグリグリと擦り付けて、王妃は支配者の悦びに陶酔の溜息を漏らす。
（……信じられない……すごく美味しそうに舐めてる……汚いのに……何で……？）
取り返して欲しいとアマリエに目で訴えても、頬を軽く上気させた半裸の美少女はサラルの畳んだ脚をリボンで固定する作業を淡々と進めている。
「イイ匂い、可愛いコの下着はやっぱり格別だわぁ……でも、こっちはもっと好物よ」
やっと満足したのか唾で更に濡れそぼった布切れをアマリエに渡し、リュドミアはサラルの股間に顔を近付ける。

「皮の間から小さなお顔が見えるわ……真っ赤になっちゃって、んふッ、可愛いッ！」
「あ……あ、ああッ⁉」
狂おしい膨張感が詰まった包茎ペニスに熱い吐息がかかったと思う間もなく、パクリと先端を口に含まれる。予想もしていなかったその熱さに、頭の先から亀頭の先まで全身が痺のように震えた。
「にゃ……ぁッ⁉　お、王妃様のッ、お口っ……熱いぃ……ッ！」
身体で一番敏感な部分への刺激に驚きながら、背筋がゾクゾクするような快感に、少年は目を見張る。
「ン！　ンン、くぅ……ッ！」
窄めた唇だけで亀頭のくびれを柔らかく扱かれて、甲高い鳴き声で反応してしまう。
「ブチュッ、ンプゥ……ふふッ、そんなに子犬みたいにクンクン言って、ハァッ、感じちゃってるのかしら……ッ？」
「可愛いなんてッ、ふぁッ……そんなこと言わないで下さ……ヒァ……ッ⁉」
（こんなツヤツヤして綺麗な唇なのに、中は生き物みたいに動いて、吸い付いて……気持ち悪いのに……き、キモチよすぎる……ぅ……）
「……こんな風に皮を被ったオチンチンも大好きだけど、ハァッ、毎晩使い込んだら、すぐに剥けて……オレーグ様みたいな立派な牡チンポになるわよぉ」
膨れ上がった二つの陰嚢が、くっきりと浮いた裏筋を掌に包まれたまま擦り付けられ、

グリュグリュと揉み込まれる。
（牡チンポなんてっ、王妃様のはずなのに下品な言葉を……あんな大きくてイヤらしいオチンチンになったら、恥ずかしくて、もう姉上の側になんていられない……）
身を切られるような寂しさと、女達に対する恐怖が、とうとう涙腺を決壊させた。
「あはは、泣いてるのね？　可愛い、ゾクゾクするわぁ……ブジュゥ……ジュルルッ、ンフゥ、ジュルルルル……ッ!!」
（ひぁッ！　お玉がブルブルって震えてッ、オシッコじゃないのに、なんか熱いのッ、出ッ……出そうッ!!）
熱くて柔らかい口内粘膜と、吸い付くように絡みついてくる舌。そしてたっぷりと溜まった唾液。その三つの温もりと感触が少年の肉棒を異常なまでに刺激し、犯す。
「ふぁッ、ああッ、ンッ……あああ……ッ!!」
射精衝動をなんとか止めようと、足指を内側に折り曲げて少年は虚しい抵抗を試みる。
（ダメッ！　出ちゃうぅ……ッ！）
だが男の身体を知り尽くしている淫乱王妃の舌射術に、温室育ちの小さなペニスが抵抗できるはずなどない。
「あンッ、王妃さ……ま……ッ、も、もうボク……ッ、ふぁッ……!?」
「イくの？　んぽぉッ……もう、ブチュゥッ……イくのね……ッ!?」
睾丸までも熱い口内粘膜に包まれて、恥ずかしいと思う気持ちすら消えてしまっていた。

「あああッ、タマタマも気持ちイイッ！　お口に食べられてッ、ヒィッ⁉　破裂しちゃうよぉッ⁉」

限界を超えた刺激に、華奢な身体が痛々しいほどに反り返った。

「ブチュッ、ンぶッ……ほらッ、いいコだからッ……ンぶちゅッ、このまま、ンほぉッ！　イくの！　イくのよッ……！」

少年の性器と、その全てを含んだ王妃の頬肉が、ぴたりと合わさり、大きく脈打った。

「ふぁッ、ああッ、ンッ……あああ……出てるぅ⁉　熱いの出てるぅぅぅッ‼」

ぶびゅるるるッ！　ブピュッ！　ブピュッ……ドピュピュゥ……ッ‼

強制精通の激感が脳髄を真っ白に焼き、少年は充血した先端から初射精とは思えない程の大量のスペルマを高々と噴き上げる。

「あああああッ！　ひァッ、あああああァッ！」

青い目を見開き口を大きく開け、端整な顔を涙と鼻水と涎まみれにしたまま、サラルはペニスから脳天までを快感電流に貫かれ、絶叫した。

「あははははッ、素敵っ！　素敵よッ！　初めてのザーメン、こんなに出してッ……！」

リュドミアが狂ったように笑い、舌を突き出して白濁の飛沫を受け止めている。

（……ッあ、ハァ……ッ……何これ……ボク……どうしちゃったんだろう……）

自分の身に何が起きたのか確かめる勇気もないまま、銀髪少年は余韻と言うには濃すぎる浮遊感と倦怠感に意識を彷徨わせていた。

「も、申し訳ありません……」
目の前で息絶えた男の形相が浮かび、つい目を閉じてしまいそうになるのを耐えた。
「ケツ穴の仕上がりも上々らしいな。まぁいいだろう、貞操帯とはもうおさらばさせてやる。その代わり、これからは栓代わりに毎晩この俺が前にも後ろにもブチ込んでやろう」
酒のせいなのか、それともついに姫巫女の純潔を奪える日が来たという喜びからなのか、今夜のオレーグは機嫌がいい。
「分かっているな？　ルキナよ、お前はもう、一生この俺の奴隷妻として生きるしかないのだ」
その言葉に、覚悟はしていたものの、全身が震えた。
「承知しております……ルキナは、バルディア王オレーグ様に身も心もお捧げいたします」
偽りの誓いだというのに、自分の言葉に子宮がビクリと反応してしまう。
（もう……わたくしの身体は堕ちきってしまったというのね……でも、わたくしの心はヤガタイの民と白龍様のもの……この獣の命を絶つことが、わたくしの姫巫女としての最後の務め……っ！）
こめかみにじんわりと汗が浮かぶ。従順な媚態の下で、戦巫女の誇りが身体の疼きと闘っていた。
「それでは、さっそく伽をしてもらおう。花嫁修業の成果を存分に見せてくれ」

横たわったままの夫の服をそろそろと脱がせながら、新妻は半勃ちの男根を唇で挟む。
（よりにもよって今夜はいつもより柔らかいのね……でも、どうしても勃たせなきゃ）
亀頭部分を舌で舐めても、いつもより硬度が感じられない。
（この感じだと、下から上に扱いた方がいいみたい）
すぐに見切りを付け、唾をたっぷりと溜めた口に夫のモノをすっぽりと咥え込む。もう、この行為を気味悪いと思うこともなくなっていた。
ジュポッ、ジュポジュポ……ッ！
神聖なはずの純白の婚礼の床で、淫らな水音が鳴り響く。
「今日はずいぶんと熱心だな、ハハッ、俺の妻になれてよほど嬉しいようだ」
「……ンッ、う、うれひいですッ、ブプッ……グポォ……」
どの部分を刺激すれば硬くなるのか、頬の締め付けをどうすれば先走りの汁を早く出せるのか、奴隷姫の口の中には男の欲望を満足させるためだけの地図が出来上がっていた。
（ここを……この、付け根の所を指で押しながら……ッ、ンン……ッ！）
根元から亀頭に向けて、性感を押し上げるように舌も絡ませながら激しく愛撫する。
（裏筋の部分も……こう、甘噛みして……）
「ご、ごひゅじんさまに、早く……チュッ、ンブゥ……早くわたくしの……純潔を、お捧げしたくて……ジュチュゥゥッ……！」
いつにない密着感に自分の口内が肉棒に吸い付く女陰にでもなったかのように感じられ、

股奥の肉がつられて熱く蠢き始める。
「ンアッ、チュプゥ……ごひゅじんさまぁ……」
柔らかい陰嚢を片方ずつ含み丹念に舌で吸い転がすと、すぐに弾力を帯びた牡玉となる。
（……んぷッ、チュルル……ッ……こんなに膨らませちゃって……これなら中の精を、わたくしのアソコに出したくて、仕方がないはずよね……ン、ぷちゅゥ……どれだけ飲まされてきたのかしら……ンッ……はぅ……ン）
これまでの精液の味が舌の上で点滅しているうちに、咽喉は勝手に鳴り、合わせていた姫割れから、とうとう一筋の糸がツーッと垂れた。
（んハァッ！　ダメ……ッ、今夜は絶対にッ、いつもみたいに感じちゃ駄目よ……ッ！）
「……ああ、いいぞ……ンッ……お前の口マンコ、素晴らしく仕上がっているな……」
汁気たっぷりの濃厚な口淫奉仕に、牡槍はどんどん太く硬くなってくる。
（……も、もうすぐッ、もうすぐ出させてあげる、から……ッ、あんッ、こんなにエラ張らせて……ここのくびれの弱い所も、全部舐めてあげる……ぅ……）
これまでに覚え込まされた舌の動きを全て使いながら、姫巫女は仇の肉棒をくまなく探り、息もつかせず愛撫した。
（んはッ、ジュルル……そう、そうよ……ブチュゥ……ッ、このまま、出して……ッ！）
男の脚の間で膝を突き、ふくよかさを増した白い尻を猛然と振り立てながら、姫巫女は男の精を絞り出そうと全身で媚び、誘う。

「うッ、そんなにがっつくな。今宵はいやというほど下の口で飲んでもらうのだからな」
「あ……ッ、も、申し訳ありません……」
身を起こされかけて、計略を見透かされたのかとゾッとしたが、胡坐をかいた男は肩透かしを喰らった少女をニヤニヤと眺めるだけだった。
「さぁ……そろそろ、愛する夫に生涯仕えるという証を貰おうか」
剛直を引き抜かれた口を手の甲で拭い、ルキナは息を呑む。
（……これで……わたくしは、白龍様の姫巫女ではなくなるのね……）
だが、美しい新妻は艶やかに微笑んで見せた。
「……はい、ご主人様……それでは、卑しい奴隷花嫁の処女膜を、ご主人様の逞しいオチンポで貫いて下さいませ」
枕を背に両膝を軽く立てた誘いの姿勢で、姫巫女は自分の淫唇を指で開く。
「さ……どうぞご存分に……」
今では蜜を湧かせていない時の方が少なくなったであろう少女の姫割れだが、その中はまだ一度の摩擦も受けたことがなく、形のよい肉花弁達は生まれた時のままの淡桃色を保って密やかに息づいている。
「ここをご主人様のオチンポで、お好きな色に染めて下さい」
上目づかいで媚びながら、ルキナはなおも誘う。
「ああ、もちろんだ……すぐに肉便器に相応しい、汚らしい肉の色に変えてやろう」

調教済みの虜姫の想像以上の艶姿に、淫王の肉剣はさらに猛々しさを増した。
「今この瞬間からお前は永遠に俺に仕えるのだからな……ッ！」
牡肉の先端が秘園の中心に当てられ、一呼吸置いてズブリとめり込む。
（ああッ、お許し下さい！　ルキナの純潔は今、この野獣に汚されます……！）
膣口に肉棒の先が押し付けられた時、ルキナはつい腰を引きかけていた。
（これはこの男を欺くため……ッ、ああ……でもやっぱりこんなの……入らない……！）
もう溢れ出ていた愛液は亀頭に絡み、充血して柔らかくほぐれた花弁が、まだ誰にも許していない最後の処女肉へ牡の欲望を誘うかのように濃い蜜臭を放つ。
「……ぁあ……ン……ッ……」
肉棒に僅かに力が込められ、膣口がジワリと広がった。
「……さぁ、犯してやろう……これでお前は、もう俺からは逃げられなくなる」
ズブゥ……ッ、ズブブッ……ミリミリ……ッ……！
薄い処女膜は、すぐに限界まで広がり、裂け始める。
「んッ！　くぅ……ッ⁉　ひッ、い……ッ、痛い……ッ！」
いくら濡れているとはいっても、膨らみきった硬い亀頭が狭い処女膣に侵入して来ているのだ。驚いた膣肉は侵入者を力一杯締め付けることになり、それがなおさら苦痛を大きくして、ルキナの顔を苦しげに歪ませる。
「……ふぅ、マン汁をダラダラ流してる割には、ンッ、ずいぶんと頑固な膜だな……」

（ひぅッ！　痛いッ！　こんなッ、アソコが裂けちゃう！　壊れちゃうッ!?）
「だがお前の純潔もこれまでだ……奥の奥まで犯して、しっかり子種を注いでやるからな」
「……はひぃッ!?　う、動いちゃ……ッ、あッ!?　やあぁッ!?」
ブチンッ！　と肉が裂けた音が、確かに身体の奥で響いた気がして、少女は張り裂けそうなまでに目を見開いた。
（あ、あ、あ……ッ、わたくしの、純潔が……ッ、とうとう……奪われた……）
肉が裂けるという直接的な痛みと、その後に広がる裂傷特有の熱。処女しか味わうことのない苦痛が飛びそうな意識の中にズキズキと突き刺さって来る。
「この痛みをしっかり覚えておけ。お前の主人はこの俺だと、子宮に覚え込ませてやろう」
ルキナの膣から肉棒が引き抜かれる。処女血で根元まで紅く染まったそれを見せ付け、再びゆっくりと腰を進めて、蹂躙されたばかりの処女膜の残骸に剛直の先端を擦り付ける。
「いッ……ひッ!?　ひぐぅ……ッ！」
凶悪な肉凶器に執拗に責められ、少女はもう途切れ途切れの悲鳴しか出せなかった。
「ハハハッ、素晴らしいッ！　お前は男に組み敷かれている時の顔が、一番美しい！」
ずにゅ……ずぼずぼずぼ……ッ！
高笑いを響かせながら、男の肉剣は穢れなき処女膣を押し広げながら最奥を目指す。
「……ンはぁ……ッ、あ、あッ……ハァッ……、ンッ……」
ずぶぶッ……ずッ、ヌッ、ヌチュッ……ニュチュ……ンッ！

鋭い破瓜の痛みは、肉棒が胎道を満たした頃には治まり、無数の肉襞をこそげられる違和感は、溢れる牝蜜の中で熱くふやけて調教された牝にとって最も好ましい感覚へと変わっていく。
（あっ、やっ……、この感じ……ッ、き、キモチ……よく……なんか……ッ！）
痛みを意識して誤魔化そうとしても、直腸での絶頂の味を覚えてしまった身体が、もう一つの牝穴で快感を得るようになるまでに、そう時間はかからない。
「んハァッ！　いっ、ひッ……、ひゃァ……ン！」
（わたくしはこれから、ハァッ、この男を殺さなきゃ……ッ、いけないのに……ッ、感じちゃ……あッ!?　ハァンンンッ!?）
ずぬぬッ……ヌチュ、ヌチュッ！
膣粘膜全体で点滅する細切れの快感は、亀頭に深々と抉られるたび、より大きくはっきりしたものに変わっていく。
（ここッ……ここでするのって、こ、こんなッ……ハァッ、キモチいいの……ぉッ!?）
ジュッチュ！　ヌチュッ！　ジュッチュ！　ヌチュヌチュ……ゥッ！
牝汁で満たされた蜜壺が肉棒に穿たれて、嬉々として水音を放つ。
（ここッ、中ッ、スゴイのッ！　んあぁ……お臍の奥まで熱くて、溶けちゃうのぉ！）
純白のシーツに滴ったばかりの処女血を飛ばしながら、ついに淫らな新妻は自分でも腰を揺すり始めていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

ATOMIC POCKET NOVELS NEW RELEASE

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル／毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価／本体690円（税込）

呪詛喰らい師2

［小説：蒼井村正／挿絵：或十せねか］

全国書店で好評発売中

凄腕退魔士の咲妃を牝奴隷に堕とす新たな敵の登場!

思春期なアダム4 聖域の崩壊

［小説：さかき傘／挿絵：天海雪乃］

全国書店で好評発売中

少女天使の暴走が平和な学園生活を破壊する!!

シリーズ急展開のバトル&エッチ!!

オトミコ！ 僕は男の巫女娘

［小説：大熊狸喜／挿絵：大空樹］

全国書店で好評発売中

男の子と女の子――

二つの性の間で揺れ動く男の娘が巻き起こす学園ラブコメディ!!

既刊LINEUP 全国書店で好評発売中

- ●仙魔学艶戦姫ノブナガッ! ①～③
- ●ビルグリムメイデン ①～③
- ●不死の吸血鬼がドSのご主人様を募集しているようです
- ●思春期なアダム ①～③
- ●呪詛喰らい師【カースイーター】
- ●女幹部メル様のセカイ征服計画!
- ●借金お嬢クリス ①～3
- ●無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです
- ●宇宙海賊学園ブラックキャット

KTC 発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル TEL:03-3555-3431（販売）FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ あとみっく文庫 検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!